ところざわ倶楽部　10 周年に思うこと

社会教育・生涯学習研究所所長　細山　俊男

所沢市民大学（以下「市民大学」とする。）がめざすものの 4 つ目に、「学びを地域に広げる」とありますが、この「学び」とは何か。いったい市民大学で何を学ぶのか。どうすれば学んだことになるのか。そして、地域に何を広げていくのか。そのことを考えてみたいと思います。

市民大学では第 1 に、「講義を聴く」ことから始まります。講座後のアンケートには、講師のいい話を聞いた、新しい知識を得た、発見があった、もっと知りたくなった、等々の感想が書かれています。講義を「聴く」ことで、新しい発見や感動が生まれることがあります。

第 2 に、「グループで話し合う」こと、いわゆるグループワークは市民大学の特徴です。話し合い、グループ企画、グループワークなどの時間が 2 年目は講義よりも多くなります。最初は、話し合いが苦手な人も多いのですが、終わってみると講義の時間よりも充実した時間だったという感想をもつ受講者は多い。これは、講義を聴くという受け身の参加から、話し合う、グループ活動をするなかで、いつのまにか能動的な関わりに進化するからです。

第 3 に、市民大学では、自分たちで「企画運営する」機会があります。グループの自由企画や飲み会もあります。2 年次のグループワークは自主運営です。そこでは受講者どうしの交流がいっそう深まります。また、市民大学修了後に、企画委員として、次期の市民大学の企画運営に携わることもできます。市民大学を受講する側からつくる側にまわるのです。学習プログラムの編成、講座の運営、グループワーク、通信発行、学びの記録作成、開講式・閉講式の運営などさまざまな実務、そして会議があります。これらのプロセスは、市民大学づくりの主体を形成します。

第 4 は、市民大学修了後に受講者が「つながる」ことです。ところざわ倶楽部を始めとするＯＢ会に入会することもありますが、グループワークで時々同窓会をすることや、親しくなった関係が継続発展することもあります。新たなサークルを立ち上げる人もいます。市民大学の 2 年間は、受講者・企画委員・講師も含め、市民大学後に続くかけがえのない人間関係が築かれる期間であると思います。それは職員も一緒です。

このように、市民大学では①聴く、②話す、③つくる、④つながる、という 4 つの学びがあったのではないでしょうか。そして、そのなかで「知識」（←講義）、「仲間」（←グループワーク）、「つなぐ力」（←企画運営）を身に着けたといえるかもしれません。もちろん人それぞれ得るものは違うと思いますが、この「知識」「仲間」「つなぐ力」を獲得する仕組みとして市民大学が存在していたのではないかと思うのです。

「学びを地域に広げる」というのは、直接的に何かを地域で配るようなことではありません。2006 年に改正された教育基本法第3条に新たに「生涯学習の理念」が加えられました。人はなぜ学ぶのか。教育基本法では、国民一人ひとりが学ぶ目的は「自己の人格を磨き、豊かな人生を送る」ためだと謳っています。そして「その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができる」ような環境を保障するのは行政の役割です。そして「その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」としていますが、社会をつくるのは私たち一人ひとりだと思います。

ところざわ倶楽部 10 周年を迎えた今、「知識」「仲間」「つなぐ力」という“学び得た力”を活かして、誰もが豊かな人生を送れるような地域社会をみんなでつくれたらいいなと思います。